

臨床検査技師教育に 「患者・家族の心理」を導入した成果 第2報 —卒業生へのアンケートから—

高田 智世*1§ 中平 洋子*2 中西 純子*3

【要 旨】 本報告では、第1報に続き平成21年度より本学の臨床検査技師教育に『患者・家族の心理』を導入した成果を検討するため、平成24~26年度卒業生60名を対象にアンケートを実施し分析した。アンケート回収率は43.3%、回答者の88.5%が病院勤務で患者・家族と接する場面があり、患者・家族と接する機会のある者のうち91.3%が本科目は役立ったとした。また、回答者の42.3%が患者に接する機会がなくても本科目は有用と答え、更に、84.6%が臨床検査技師教育課程で本科目を学ぶ意義があると答えた。今回の調査では、卒業後において、概ね本科目の必要性・有用性を示す結果となったが、病院勤務である者の割合が多く日常業務において患者・家族と接する機会があったことも一因であると考えられる。一方で患者対応がない業務に従事している者における本科目の意義付けについては検討の余地があると考えられた。

【キーワード】 臨床検査技師教育、患者・家族の心理、卒業生、アンケート

はじめに

近年、「チーム医療」が重要視され始めた背景のなかで、本学では医療人の一員として、患者や家族の心理に配慮できる臨床検査技師の育成が重要との考えから、平成21年度のカリキュラム改正時に臨床検査学科の専門基礎科目に『患者・家族の心理』を4年次実習直前に15時間(1単位)を開講している。

ところで、本科目を開講した時期から遡った平成19年には厚生労働省医政局長通知(12月28日付)が発出され「医師及び医療関係職と事務職員等との間等で役割分担の推進について」のなかで、

「採血、検査説明については、医師等の指示の下に看護職員及び臨床検査技師が行うことができることとされているが、医師や看護職員のみで行っている実態がある」と指摘されている。その後、これを受けた形で、平成24年に一般社団法人日本臨床衛生検査技師会は「チーム医療推進検討委員会」を発足し、検査説明・相談ができる検査技師の育成に向けて取り組みを開始し、患者心理も盛り込んでいる¹⁾²⁾。

更に、平成26年6月25日には「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」が公布されたなか、臨床検査技師の検体採取に関する業務拡大が

*1 愛媛県立医療技術大学保健科学部臨床検査学科 § takata@epu.ac.jp

*2 同 看護学科、*3 愛媛県立医療技術大学保健科学部

盛り込まれ、患者に直接関わる機会が拡大してきている。

そこで、在学生による本科目からの学びを報告した第1報に続いて、第2報として本科目の卒業後の評価について検討した。

I. 研究目的

本科目が卒業後にどのような影響をもたらしたか、卒業後に本科目をどう評価したのかを明らかにし、臨床検査技師教育課程に『患者・家族の心理』を導入した成果について卒業後の視点から検討することで、社会の変化に対応できる医療人として臨床検査技師教育のあり方を考える一助とする。

科目の概要については、中平ら³⁾の第1報を参照。

II. 方 法

1. 対 象

平成24～26年度に臨床検査学科を卒業した60名とした。

2. データ収集期間

平成28年2月29日～3月18日にアンケートを実施した。

3. データ収集方法

郵送にて無記名式アンケートを行った。調査項目は、患者・家族と接する機会の有無や頻度のほか、本科目の就職後における役立ち度、有用性、意義に対する意見や要望、臨床検査技師教育課程における必要性など11項目について質問した(表1)。分析方法については、選択肢回答項目は単純集計し、自由記述については内容分析を行いカテゴリー化した。尚、倫理的配慮については、中平ら³⁾の研究と同様に愛媛県立医療技術大学倫理委員会の承認(H27-018)を経て実施した。

III. 結 果

アンケート回収率は43.3%(26名)であった。

1. 回答者の背景

回答者の卒後年数は卒後1年が38.5%、卒後2年15.4%、卒後3年34.6%、不明が11.5%であった。所属施設は病院勤務が88.5%を占め、健診施

設7.7%、その他(大学院)3.8%という回答であった。また、患者・家族と接する頻度が「ほぼ毎日」と答えた者が69.2%、「週に1～2回程度」が7.7%、「月に1～2回程度」11.5%と9割程度の人

2. 現在、患者・家族と接する機会のある者における本科目の有用性

患者・家族と接する機会があると回答した者(23名)に対し、どのような検査分野で接する機会があるか(選択式・複数回答可)と聞いたところ、「生理機能検査(21名)」「採血(11名)」において接する場面が多く、次に「血液学的検査(6名)」、「一般検査(4名)」「臨床化学検査(1名)」、「免疫血清・輸血検査(1名)」となった。その他として「健診(1名)」や「栄養サポートチーム(以下NST)(1名)」として接する機会があると回答した者もいた。

更に具体的な場面(選択式・複数回答可)についてあげてもらおうと、「生理機能検査の実施時(20名)」「採血の時(11名)」が多くを占めたが、「NST(2名)」「検査結果説明(1名)」「出血・凝固時間検査(2名)」「自己血糖測定の指導(1名)」「健診(1名)」「病院内で検査結果の報告書を渡す時(1名)」も挙げた。

これら患者・家族と接する機会のある23名に『患者・家族の心理』から学んだことが役立ったかを問うた結果、91.3%(21名)が肯定的であった(図1)。更に、どのように役立ったかという質問(選択式・複数回答可)について21名全員が「検査や検査説明の際の気遣いや説明の仕方について患者心理を考えるようにしている」と答えた(図1)。その他の自由意見として、卒後3年の回答者には“性別、年齢、重病(傷)度など個人差があり、正解が1つでなくその人その人に合った対応が必要だと日に日に強く感じる”と答えた者もいた。一方で、『患者・家族の心理』の学びが役立ったことに否定的だった者は8.7%(2名)で、その理由を聞くと、“授業内容を具体的に覚えておらず、先輩を見て学ぶことが多いから”“普通の気配りはすることはあっても短い検査時間にそこまで深

表1 『患者・家族の心理』アンケート調査内容

1	卒業年度を教えてください。 ①平成24年度 ②平成25年度 ③平成26年度
2	現在の所属施設の形態を差し支えない範囲でお答えください。 ①病院 ②健診施設 ③検査センター ④その他()
3	工作上、患者や家族と接する場面はありますか？ ①ほぼ毎日 ②週に1~2回程度 ③月に1~2回程度 ④年に1~2回程度 ⑤殆どない →①~④と回答した方は、質問4~11にお答えください。 →⑤と回答した方は、質問8~11にお答えください。
4	直接、患者・家族と接したことがある検査はどの分野ですか。(複数回答可) ①生理機能検査 ②採血 ③臨床化学検査 ④一般検査 ⑤臨床微生物検査 ⑥臨床血液検査 ⑦免疫血清・輸血検査 ⑧病理検査 ⑨その他()
5	患者と接する場面はどのような仕事の時でしたか。(複数回答可) ①生理機能検査実施時 ②採血時 ③検査結果説明時 ④糖尿病療養指導士として ⑤感染対策チームとして ⑥栄養サポートチームとして ⑦その他()
6	患者や家族と接する際、本科目から学んだことが役立ちましたか？ ①はい →質問7へ ②いいえ →その理由を可能な範囲で記載してください。()
7	本科目がどのように役立ちましたか？(複数回答可) ①検査や検査説明の際の気遣いや説明の仕方について患者心理を考えるようにしている。 ②患者だけでなく家族の心理について考えることがある。 ③他職種と患者や家族の情報共有に努める。 ④その他()
8	患者や家族に直接接する機会がなくても、卒業後に本科目が有用だったと感じることはありますか？ ①はい →質問9へ ②いいえ
9	本科目がどのような時に有用だったか具体的に記載してください。(自由記述)
10	臨床検査技師教育課程で本科目を学ぶ意義があると思いますか？ ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない ④あまりそう思わない ⑤そう思わない ①と②に回答した方はその理由を記載してください。()
11	本科目で更にどのようなことを学べられたらよかったですか？(自由記述)

く患者さんと関わらないから”という意見であった。

3. 患者や家族に接する機会がない場合における本科目の有用性

臨床検査技師として、患者に接する機会がなくても本科目は有用かを回答者の患者・家族と接する機会の有無に関わらず聞いたところ、肯定的意見は42.3%で、否定的な意見は30.8%であった(図2)。肯定的意見であった者に有用性を感じた理由について自由記載してもらくと、「検体の向

こうに患者がいることを意識するようになるから(4件)」「患者の立場・不安を考えるようになるから(4件)」等の意見がみられた。

4. 臨床検査技師教育における本科目の意義

臨床検査技師教育課程で本講義を学ぶ意義があるかについて、「そう思う」「ややそう思う」と肯定的だったのは84.6%で、その理由を自由記述してもらったと表2のように6つの理由が挙げられた。学ぶ意義があると答えた理由として、“検査技師も患者さんと接する機会が思っていたよりも多か

患者・家族と接する際、本科目が役に立ったか(n=23)

本科目がどのように役立ったか(複数回答可)

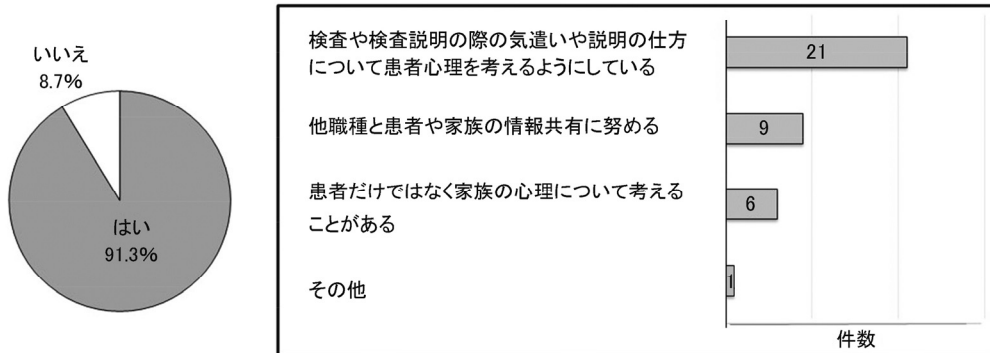


図1 患者・家族と接する際の『患者・家族の心理』の役立ち度

患者に接する機会がなくても本科目は有用か(n=26)

有用性を感じた理由

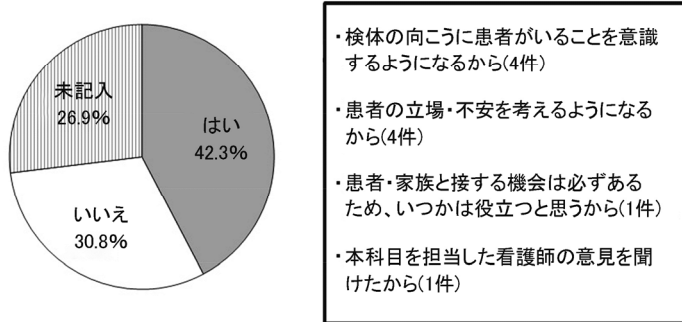


図2 『患者・家族の心理』の有用性とその理由

表2 臨床検査技師教育課程で『患者・家族の心理』を学ぶ意義についての理由

意見まとめ	件数
検査技師も患者と関わる場面が予想以上に多く、今後も増えてくるから	8
患者と接することがなくても患者の心理を学ぶことは必要と考えるから	5
医療チームの一員として患者・家族の心理に配慮することは必要だと思うから	4
患者の心理を考慮し対応することでスムーズに正確な検査が行えるから	4
患者と接する場面で対応の方法を考えるきっかけになっているから	2
深刻な説明をするような時に役立つと思うから	1

ったから(卒後1年)”“病院で働く上で、患者さんやご家族と接する場面は予想以上に多く、本講義で考え方を学べたことが良かったから(卒後3年)”のように医療現場に出て検査技師と患者の関わりを感じたからという意見のほか、“検査室

で検査するだけでなく、病院のスタッフとしての言動が求められるから(卒後3年)”“医療従事者は専門知識に詳しい分、一般の人と考え方がずれている部分がどうしてもあるように感じる。本講義を通じて患者さんに配慮することの必要性を学

表3 本科目でどのようなことを更に学ぶことができればよかったと思うか(個人番号をIDで示している)

カテゴリー	サブカテゴリー	データ(例)
生の声	患者・家族の生の声(4件)	検査に関わるような事例における患者・家族の声をいくつか知りたかった。(ID21)
	患者・家族との直接の対応実習(3件)	座学だけでは、あまり実感や現実味がなく、いまひとつ理解が薄いような気がする。実際に病院に行き、患者さんと対面する機会等があった方が更に理解が深まったのではないかと思う。(ID4)
心理学的裏付け	心理学的な裏付け(2件)	こういう質問をされる時はこのような心理が働いているから等、心理学的なことも一緒にあると、行動からも患者の気持ちをくみ取ることができるのではないかと思う。(ID6)
対応方法	不安な患者への具体的な対応(3件)	生理機能検査の際、患者から検査結果を聞かれる。検査技師として答えてよい範囲がわからず、医師から聞いてくださいと言うと泣かれたことがあった。不安を煽らず医師の診断の邪魔にならないような答え方を今でも考えている。(ID5)
	多様な場面・患者の想定(3件)	患者には、様々な事情をもっており、一人ひとり性格も違う。色々な患者について更に詳しく学べると良いのではないかと思った。(ID8)
	クレーム対応(1件)	患者や家族の方の機嫌を損ねてしまった時、もしくはクレームをつけてくる患者への対応の仕方に苦労しているので、そういうところをもう少し学ぶことができれば将来に役立つのかなと思う。(ID2)
介助技術	移動介助技術(1件)	患者一人では車椅子からベッドへ(またはその逆の場合)移動できない患者に対し、どのように補助するべきかも学べるとよかったと思う。(ID3)

べたから(卒後2年)”のように医療人として必要であるという意見、また、“生理機能検査で毎日ご家族と接しているが、技師の表情や説明の仕方ひとつで患者さんが不安になったり、機嫌が悪くなってしまう事が時々ある。本講義を通して少しでも患者さんやご家族の気持ちを理解することができれば、患者さんにとっても技師にとっても良い検査ができると思うから(卒後3年)”のように正確な検査実施には必要だという意見もみられた。自由意見は、卒後2年と卒後3年において具体例の記載が多くみられた。

5. 本科目に対する要望

本科目への要望について17件の自由意見をカテゴリー化すると、患者の【生の声】【心理学的裏付け】【対応方法】【介助技術】にまとめられた(表3)。表3のIDは個人番号、()内は研究者

の補足である。

卒後2年以上で多く挙がっていた要望については、サブカテゴリーとして<患者・家族の生の声>、<患者・家族との直接の対応実習>、<多様な場面・患者の想定>と実践的で多様な患者対応を学びたかったという意見がみられ、更に、卒後3年から出た要望では、患者の<心理学的な裏付け>、<クレーム対応>が挙げられた。

IV. 考 察

1. 現在、患者・家族と接する機会のある者における本科目の有用性

患者・家族と接する機会があると答えた者の殆どが生理機能検査においてと回答し、約半数が採血業務と答えていた。そのため、患者・家族と「ほぼ毎日」接すると回答した者が69.2%いたと

推測できる。回答者に患者と接したことがある業務内容に偏りが見られたのは、卒業後3年までが対象だった影響もあると考えられた。

今回のアンケートにおいて、本科目が役に立ったと答えた者(91.3%)に理由を選択(複数回答可)してもらおうと、全員が「検査や検査説明の際の気遣いや説明の仕方について患者心理を考えるようにしている」と答えていた。これは前述のような、特に患者・家族と接する機会が多い検査業務に携わっている者が多かったためもあると考えられる。中平ら³⁾による在校生への調査結果では、本科目からの学びとして【検査を受ける患者・家族の心情】、【対象理解の必要性と難しさ】、【患者・家族への対応】が明らかとなっている。また、【検査の捉え直し】として、検査時の自分の対応が検査結果に影響することも学んでいた。今回の卒業生アンケートの対象者と中平ら³⁾のアンケートの対象者は同一ではないが、同じ学修内容であったことを考えると、検査時に人と接するとき誰にでも同じ対応を行うのではなく、本科目で学びを得たことで対象の理解を深める配慮や努力をしながら検査を行うことの重要性や必要性を卒業後も感じているのではないかと考えられた。このことは、本科目が役立った理由に関して42.9%が選択した「他職種と患者や家族の情報共有に努める」ことや、卒業3年の回答者からの自由意見として“性別、年齢、重病(傷)度など個人差があり、正解が1つでなくその人その人に合った対応が必要だと日に日に強く感じる”という記載からも窺えた。

2. 患者に接する機会がない場合の本科目の有用性

本アンケート回答者の42.3%は患者に接する機会がなくても本科目が有用だと答えた一方で、30.8%は否定的な意見であった。肯定的に答えた理由の自由記載をまとめると、「検体の向こうに患者がいることを意識するから」「患者の立場・不安を考えるようになるから」と回答したことは、中平ら³⁾の報告にあった【検査の捉え直し】の<検体の向こうに“人”を意識する>や【検査を受ける患者・家族の心情】に関連した内容であると考えられた。また、現在の業務で直接接する機

会がなくても「患者・家族と接する機会は必ずあるため、いつかは役立つと思うから」という意見があったことは、職場で患者と接する場面が多くなりつつあることを実感したことによるのかもしれない。一方で、否定的意見も30.8%を占め、本アンケートではその理由は問うていないため明らかにできなかった。

3. 臨床検査技師教育における本科目の意義

回答者の84.6%が教育課程の中で学ぶ意義があると答えた。この結果は、前述した患者に接する機会がない場合の有用性に肯定的だった割合が42.3%だったにも関わらず、高い結果となった。理由で最も多かったのが「検査技師も患者と関わる場面が予想以上に多く今後も増えてくるから」とあり、医療現場に出て臨床検査技師が患者・家族と接する場面が予想を超えて多いことを実感した結果だと考えられる。更に「医療チームの一員として患者・家族の心理に配慮することは必要と考えるから」「患者と接することがなくても患者の心理を学ぶことは必要と考えるから」については、中平ら³⁾の【目指す臨床検査技師像の構築】の<医療チームの一員として協働できる臨床検査技師><患者家族の思いに寄り添える臨床検査技師>に相当する意見だと考えられる。今回の結果より、患者・家族と接する機会の有無に関わらず、臨床検査技師も積極的に医療に貢献していくために医療人として本科目を学ぶことの必要性・重要性を認識していると考えられた。

チーム医療を推進しているなか、臨床検査技師は検査の専門家として、検査や採血の際に患者への説明を行うことの重要性を認識し⁴⁾⁵⁾、検査結果説明にも取り組みつつある⁶⁾。しかし、チーム医療における関わりが十分とは言えないことから、日本臨床衛生検査技師会が検査説明・相談のできる臨床検査技師の研修会を実施し始めている¹⁾²⁾。実際、検査の説明・相談は医師や看護師の負担軽減だけでなく患者満足度にも繋がるといわれている⁹⁾。しかしながら、杉山ら⁹⁾によると検査説明・相談をただ行うだけでなく、スタッフがより患者に対して不安をやわらげるような説明をすることが大事であると報告している。更に、中野

ら¹⁰⁾は、医療現場から求められている学校教育のなかに患者心理への理解力をつけることの必要性を述べており、今後、臨床検査技師養成校のカリキュラムにおいても基礎教育として、患者心理を理解する教育が必須内容となってくるのではないかと考えられる。臨床検査技師もチーム医療の一員として、病棟検査技師の活動¹¹⁾や高齢化社会に対応した認定認知症領域検査技師の創設のように、多様な背景をもつ患者・家族と積極的に関わるようになりつつある。このようななか、患者に寄り添った医療に貢献するために、臨床検査技師の専門性を更に生かせる新たな視点の気づきに繋がるのではないかと考える。

一方で今回の検討では、日常業務において患者・家族と接する機会がある回答者が多かったため本科目が有用と答えた者が多かった可能性もあり、患者対応がない業務に従事している者による本科目の意義付けについては、今後更なる検討の必要があると考えられた。

4. 本科目に対する要望

卒後2年以上で多くあがった要望は具体的かつ実践的な内容で、臨床現場の経験が長くなるほど様々な場面や多様な患者に遭遇していることをうかがわせた。更に、卒後3年では〈クレーム対応〉という場面に出会うこともあり、患者や家族の心理を〈心理学的裏付け〉として学問的に理解することで、対応の難しい患者にもより適切な対処ができると考えていることが推測された。

本調査で本科目に多くの要望を得たことから、今後、実践的な内容を盛り込む工夫や臨床心理士による講義の導入も検討する必要があると考えられた。

5. 本科目の臨床検査技師教育における重要性

第1報の在校生の本科目で学んだ内容を見ると卒業生の結果と繋がる部分が多く、本科目の在学時の学びが、卒後にも臨床現場において臨床検査技師としての仕事の取り組みに活かされていると考えられ、本科目の重要性を確認できた結果となった。それは、本科目の必要性について概ね9割弱が肯定的で「検査技師も患者と関わる場面が予想以上に多く今後も増えてくるから」という意見

が最も多く、更に本科目に対する要望が、特に卒後2年以上の回答者から具体的な内容が多くでたことからうかがえる。本科目からの学びや気づきは、患者と関わる場面が増えてくる卒後年数を経てより活かされる可能性がある。

平成21年度に本科目をカリキュラムに導入した際、授業内容については手探りで学生にどのような影響をもたらすか未知数であった。しかし、毎年、こちらの予想を超えて学生が真摯に取り組む姿勢をみると、医療人として本来学ぶべきことだと認識しているのではないかと感じている。更に、検査に関する知識・技術を中心に学んできた学生にとって本科目が“医療人として臨床検査技師は何ができるか”ということを考える機会になり、卒後の臨床検査技師としてのあり方にも影響をもたらしているものと思われる。

現在、社会的背景の変化から臨床検査技師も患者・家族と接する機会が増えてきているなかで多職種と連携し、医療に貢献できる臨床検査技師はどうあるべきかということを考える際に、専門的な知識・技術の追究だけでなく、臨床検査技師も常に患者とその家族を理解しようとする姿勢をもつことが、医療人としてのより一層強い責務と倫理観のほか、患者・家族のために何ができるかを考えられる医療人に繋がると考えている。それは、決して臨床現場だけでなく、研究者や教育者、行政機関等で活躍する場合においても必要な視点だと思う。本科目を開講してまだ4年目であるため、今後も継続して評価することで、より効果的な教育内容について検討し深化させていく必要があると考える。

V. 結 論

1) 患者・家族と接する機会がある者のうち約9割が本科目は役立ったと評価し、検査の際に患者心理を考えた気遣いや説明を行い、他職種と患者・家族の情報共有に努めていると回答した。

2) 患者・家族と接する機会の有無に関わらず、約4割が患者・家族と直接接する機会がなくても本科目が有用であると評価し、概ね9割弱が臨床検査技師教育で『患者・家族の心理』を学ぶ意義

があると回答した。

3) 卒業生に対する本科目に関してのアンケート結果は、中平ら³⁾による在校生の学びの結果と符合する意見が多く、本科目で得た患者理解や視点が卒業後にも繋がっていることを示唆する結果であった。

4) 本科目に対する要望は、卒後2年以上の意見において具体的な内容が多くでたことから、本科目の学びや気づきは卒後年数を経てより活かされる可能性があることが示唆された。

謝辞：研究にご協力くださいました平成24～26年度卒業生の皆様、および本科目の教育協力者に感謝いたします。

文 献

- 1) 丸田秀夫. 検査説明・相談ができる臨床検査技師の育成—現状と課題を中心に. *Medical Technology* 2014; 42: 1245-9.
- 2) 萩原三千男. 検査説明・相談ができる臨床検査技師育成～日臨技としての取り組み～. *生物試料分析* 2015; 38: 87-92.
- 3) 中平洋子, 高田智世, 中西純子. 臨床検査技師教育に「患者・家族の心理」を導入した成果 第1報—授業終了後のレポート・感想文から—. *臨床検査学教育* 2017; 9(2): 194-201.
- 4) 各務新二. 外来診療の場における臨床検査技師による採血業務に関するインフォームド・コンセントの実践 第1報 採血者の調査を通して. *医学検査* 1995; 44: 939-43.
- 5) 大久典子, 小川浩正, 長尾愛子, 村山伸樹, 吉田克己. スパイロメトリの検査結果に及ぼす検査技師の介入の影響. *臨床病理* 2010; 58: 337-42.
- 6) 内田美寿子. 検査説明・結果説明ができる技師教育について. *臨床病理* 2013; 61: 353-9.
- 7) 工藤奈美, 多田恵梨子, 芳賀久美, 福士紀行, 佐々木辰也. 臨床検査技師によるチーム医療への参加: 検査説明. *日本クリニカルパス学会誌* 2014; 61: 176-8.
- 8) 富樫 信, 村屋 保, 小川曜一, 名古屋友希, 木村 純. 検査説明コーナー開設～一年が経過して～. *全国自治体協議会雑誌* 2014; 53: 564-7.
- 9) 杉山梨奈, 北田久美子, 松浦真人. 患者満足度向上に向けた臨床検査技術科の取り組み. *京都市立病院紀要* 2015; 35: 12-4.
- 10) 中野京子, 藤岡美幸, 木田和幸, 齋藤浩治. 青森県の医療施設における検査説明の現状と学校教育. *医学検査* 2010; 59: 213-8.
- 11) 中根生弥, 山田幸司, 青山敦子. 「病棟検査技師」としての活動とその意義. *IRYO* 2015; 69: 84-8.